

教員人材育成論再考

校長 竹田 義宣

1 はじめに

学校教育を充実させるためには、教員の指導力によるところが大きく、教員の資質能力の向上を図ることが常に求められている。直近では、令和3年1月の中央教育審議会答申『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して』において、全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びを実現するため、Society5.0時代における教師及び教職員組織の在り方について提言されている。¹⁾

令和4年度からの新学習指導要領の実施、学校での働き方改革の推進、そして、昨年度末からの生徒一人一台端末の導入も含めたコロナ禍での高等学校教育を取り巻く環境の変化等、今、改めて教員として何を大切にすべきかが問われていると考える。

そこで、自分の高等学校教員としての勤務を振り返るとともに、教育行政において、教員養成・採用・研修に関わる仕事を担当した経験を踏まえて、筆者なりに、教員の人材育成についての思いを記すこととする。

なお、教員という用語については、類似のものとして、教師、先生等があるが、ここでは、学校に勤務する教育公務員としての側面を重視して、教員の用語を使用する。

2 岡山県における公立学校教員の人材育成

(1) 岡山県公立学校教員等人材育成基本方針

平成28年3月、岡山県教育委員会は、これまでのライフステージごとの資質能力から、新たにキャリアステージ²⁾に対応した人材育成基本方針³⁾を定め、求める教員像を次のように明示した。

- ・岡山県の教育課題を深く理解し、果敢に立ち向かうことのできる教員
- ・強い使命感と情熱、高い倫理観、豊かな教育的愛情をもった教員
- ・多様な経験を積む中で協働して課題解決に当たるなど、生涯にわたって学び続ける教員

ここでは、「岡山県の教育課題」(ひいては、それを受けての自校の教育課題)や「協働」が特徴的なキーワードと考えられる。

また、ベテラン教員の大量退職と若手教員の大量採用等人材育成の課題に対応した五つの基本方針を定めた。

- ・教員としての人間力の向上
- ・大学との連携による養成・採用・研修の一体的改革
- ・チームによる校内研修の改革・充実
- ・新たな教育課題に対応する指導力の向上
- ・キャリアステージごとの育成指標の明示と職能成長の支援

(2) 岡山県教員等育成指標及び研修計画

さらに、県教育委員会は、教育公務員特例法の一部改正を受けて、県内 16 大学と「岡山県・岡山市教員等育成協議会」を設置して協議し、平成 29 年 12 月には、改めて新規採用時を含めた育成指標と研修計画を作成した。⁴⁾

育成指標はキャリアステージを 6 段階（①新規採用時 ②若手教員 ③中堅教員（前半・後半） ④ミドルリーダー ⑤ベテラン教員 ⑥管理職）に区分し、各段階で求められる資質能力を次の三つの領域に整理している。

- ・確かな指導力（専門性、授業をつくり改善する力、生徒指導力、学級経営力、教育課題対応力等）
- ・同僚、家庭、地域とつながる力（リーダーシップ、チームマネジメント、家庭・地域と連携・協力する力等）
- ・基盤となる資質（教育に対する揺るぎない情熱や使命感、社会人としての自覚、向上心等）

具体的な育成指標は、次の【例】のように、段階ごとの記述となっている。また、この育成指標を活用するため、「教育実習評価モデル」及び「キャリアデザインノート」（教職人生全体を通じた目指す教員像やそれに近づく過程をキャリアデザインとして描くためのツール）を添付している。

・【例】教育課題対応力

新規採用時：地域の実態や学校の教育課題を理解し、課題解決に向けて取り組む意欲がある。

若手教員：教育の動向を踏まえ新たな教育課題（ICTを用いた指導法等）に取り組むことができる。

中堅教員（前半）：教育の動向を踏まえ新たな教育課題（ICTを用いた指導法等）への対応策を練り、実施することができる。

中堅教員（後半）：教育の動向を踏まえ新たな教育課題（ICTを用いた指導法等）への対応について、組織的な取組を進めることができる。

ミドルリーダー：教育の動向を踏まえ新たな教育課題（ICTを用いた指導法等）への対応の中核として、組織的な取組を進めることができる 等

この指標に対して、「現役の教員、教員志望者の中には、これだけの資質や能力を求められるのかと、我が身を省みて自信喪失する者もいるのではないだろうか。」と評される場合もある。⁵⁾ また、とにかく ICT を使用すればよいのか、という批判も想定される。

しかし、これらの指標は、当該ステージに達した段階で初めて取り組むことが求められるのではなく、一人一人の教員が、各学校のミッションと日々の教育活動を踏まえながら、学校や自己の課題を発見・解決していくプロセスを重視しており、学び続ける教員像を基盤としている。

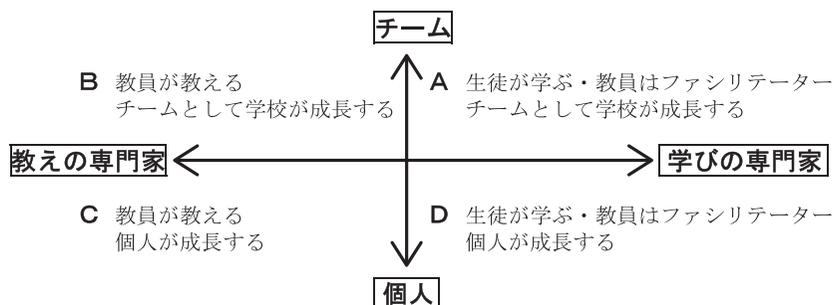
また、教員が一人で自己成長するだけでなく、同僚と学び合い、高め合い、チーム⁶⁾として成長していくことが期待されている。ICT 導入が目的ではなく、ICT を用いた指導によって生徒の学力が向上することが重要なのである。もちろん、教員や学校は、変化に背を向けるのではなく、訪れる変化を前向きに受け止めていくことが必要である。⁷⁾

(3) 教員の成長の類型

高瀬淳は、「各教科等に関する知識を持った「教への専門家」としての側面だけでなく、学習観の転換を伴った「学びの専門家」としての教員の育成が強調されており、別な言い方をすれば、教員に求められる資質能力は、児童生徒に身に付けさせたい力と同様であり、教職員同士の「関わり合い」の中で、教員一人一人の「主体的で・対話的な深い学び」を組織的・継続的に支援することによって育まれると考えられます。」⁸⁾と述べている。

また、高旗浩志は、「教職の体幹にあるのは授業実践力です。その体幹を鍛えるために必要なことは、繰り返し自らの実践を問い直す、「考え抜く力」だと思います。すなわち、「①なぜこの教材で教えるのか／②なぜこの方法で教えるのか／③その教材や方法は、子どもにとってどのような意味と価値をもつのか」これを自らの実践に向けて問いかけ、他の教師と共有し、相互に議論を深めることが、校種や教科の垣根を越えた「教師の協同」への第一歩です。」⁹⁾と述べている。

この二人の論から、授業づくりにかかわる教員の成長の類型を次のようにとらえることとする。



図：教員の成長の類型

3 体験的人材育成論—主な取組みと類型による分類—

筆者の2校約10年間の若手教員時代の授業づくりについての主な取組みをエピソード的に振り返り、上記の類型に当てはめる。

多くの年度が、「日本史と現代社会」、又は、「世界史と現代社会」の組み合わせで科目を担当していた。この時期、毎日の授業で教科書をを進めることで精一杯であり、日々が過ぎていった。

しかし、岡山県高等学校教育研究会社会部会研究委員や全国社会科教育学会等で実践研究の発表をする機会が与えられ、授業づくりについて次の目標をもつようになった。

- ・日々の授業を改善するとともに、少なくとも一年に一単元の自分が面白く、かつ、生徒を引き付けることのできる授業づくりを行う。

【取組み①】→類型C

前半の目標を達成するための手立てとして、問いと資料と解答の質を向上させることとし、授業プリントの自作を行うこととした。原則として次の内容を盛り込んでいった。

- ・導入：本時のMQ（メイン・クエスチョン）を導き出すための資料を入れる。資料は、生徒

の興味・関心を引き、身近で具体性を持ち、既存の知識・経験をゆさぶるもの。

- ・展開：MQを追究するために必要なSQ（サブ・クエスチョン）、SSQ（サブ・サブ・クエスチョン）とその問いに答えるための資料と解答記入欄。問いと答えを構造化して、授業での発問・指示を考え、プリントに配列する。
- ・終結：探究を通して獲得したMQの解答をモデル図や文章にまとめる。MQの解答は、本時の目標（教育内容）であり、個別的な知識でなく、一つの地域・時代・社会を説明できる概念的説明的知識であることが望ましい。¹⁰⁾

【取組み②】→類型D

また、生徒の歴史に対する問題意識を探るため、1校目の勤務校では、「日本史学習日誌」を毎時間当番の生徒に記述させていた。本時のテーマ、わかったこと（図示）、わからなかったこと・疑問（文章で）、感想（文章で）からなるB4判のもので、クラス日誌のように毎時間生徒の疑問へのコメントを付けて回覧した。

【取組み③】→類型D

2校目の勤務校では、1クラス～3クラス程度の生徒を対象として、日本史について時代ごとに「疑問・調べてみたいこと」のアンケート調査を実施した。目的は二つあり、一つは、生徒の問いを分析すれば歴史に関する知識の水準が明らかになるからであり、二つ目は、問題意識の方向と問題意識の欠落の方向が明らかになり、生徒の問題意識を拡大する授業が可能となると考えたからである。このアンケートは主に集団としての傾向性を把握するために行った。

取組み②と③の生徒の疑問は、取組み①のMQやSQ等に反映させた。

後半の目標を達成するために開発した授業の概要の一部を示す。

【取組み④】→類型C

- 「社会史」の成果を活用した授業づくり：単元「中世ヨーロッパ史への招待－「ハーメルンの笛吹き男」伝説の世界－」
 - ・中世ヨーロッパ世界の大まかなイメージをつかむことを目標とする。阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男－伝説とその世界－』等に学び、「この伝説の核をなす歴史的事実とは何か」、「なぜこの事件は起こったのか」、「なぜこの事件が広く知られるような伝説になったのか」を追究していく。

【取組み⑤】→類型C

- 「社会史」にもとづく歴史授業づくり：単元「動物裁判と中世ヨーロッパの自然・人間関係」
 - ・「社会史」の歴史理解の方法（社会の全体構造・人間の心性・両者の相互作用の在り方の理解）を授業構成に取り入れ、動物裁判（動物・昆虫を人間と同じ手続きで裁き処刑する）を追究することによって、その背景にある中世ヨーロッパの政治・経済・文化構造と自然と人間の関係を解明する。池上俊一『動物裁判－西欧中世・正義のコスモス－』等に学び、「動物裁判とは何か」、「なぜ中世前期に動物裁判はなかったのか」、「なぜ近代以降、動物裁判は消滅したのか」を追究していく。

【取組み⑥】→類型C

- 「問題史」にもとづく歴史授業：単元「服部君射殺事件と民衆の武力」

・ここでの「問題」は現代社会や未来社会にとっての問題状況の歴史的根源を探る学習問題を意味している。1992年アメリカで起きた日本人高校生・服部君射殺事件を取り上げる。この問題の背景には、アメリカ人の武装感覚と日本人の非武装感覚が存在することが指摘されている。日本人の非武装感覚の根源を探ることにより、刀狩り、廃刀令、占領軍による武装解除政策の意味付けとそれぞれの時代の社会構造を解明する。

藤木久志「刀狩りを見る目」(『歴史評論』493号)等から学び、「被告の無罪判決に対する日米両国民の反応に違いがあるのはなぜか」、「日本において個人(民衆)の武装が禁止され、実力行使(自力救済)が否定されたのはいつか、それはなぜか」、「秀吉政権～江戸初期を境目として、個人(民衆)は武器を所持しながら実力行使を行わなくなったのはなぜか」を追究していく。

【取組み⑦】→類型D

○生徒が主体的に活動する授業づくり：「現代社会」調査研究・レポートづくり

・「現代社会」のまとめとして、興味・関心のある社会事象を調査研究し、疑問を自ら発見し、自ら考える力を育成することを目標とした。手順は、「一人一人が調べたいテーマ提出→クラスの統一テーマの決定→調査研究方法の講義→統一テーマに関連した個人テーマの設定→個人の調査研究→個人のレポート作成→個人のプレゼン→クラスでの協議とまとめ」とした。

4 おわりに

教科指導についてのエピソード的な振り返りであるが、類型Cと類型Dに集中している。若手教員の場合は、まずは自分がしっかりと教えることができるように成長することが必要であると言えることはできる。

しかし、石井英真が「高校などにおいては、「学問の香り、ホンモノの香りのする授業」という言葉で、ホンモノの素材や問いをぶつけ、教師の語りや背中その道のおもしろさを示すような、受験勉強を超えて大学の学問につながるような授業がめざされてきました。しかし、それは、一部の生徒たちを感化する(教師の社会や学問への関心や姿勢が伝播する)ことはあっても、すべての生徒たちにその教科のうまみを保障する仕掛け(その教科が苦手な生徒の心もくすぐるような教材や、一人では立ち向かえない課題にグループでともに支え合いつつ挑戦するような学習形態等)が工夫されていたとは言えません。」と述べるように、¹¹⁾ 類型B、C、Dに加えて、類型Aの取り組みを学校の実態に応じて推進することが重要である。

なぜなら、生徒が、大学と大学の向こう側の社会で生き抜いていく力の基礎を育成するためには、「主体的・対話的で深い学びと教育方法の強化」や「唯一の正解が存在しない課題の探究」を実践することのできる教員を育成する必要があるからである。¹²⁾

また、学びのデジタル化の中で、生徒の学習データ(スタディ・ログ)にのみ基づいたAI的な授業づくりに対して、これまでも大切にされてきた、授業のさなかにおいて生徒の状況に対応する即興的思考¹³⁾ができる教員が必要だからである。

注

- 1) 中央教育審議会 2021 『令和の日本型学校教育』の構築を目指して－全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現－（答申）』P86
- 2) ライフステージは、経験年数に応じたその段階ごとの求められる教員像や研修を位置付けたものであり、キャリアステージは、自分の職業的な将来像を描き、それに近づく過程を自分で描いて研修等を主体的に選択することを強調している。
- 3) 岡山県教育委員会 2016 『岡山県教員等人材育成基本方針』
- 4) 岡山県教育委員会 2017 『岡山県教員等育成指標及び研修計画』
- 5) 朝比奈なを 2020 『教員という仕事』朝日新聞出版 P80
- 6) グループについては、単に「集まり」を意味するとし、チームについては、目的のために力を合わせたものにとらえる考えがある。新聞広告「日本ハムグループはグループじゃない。チームだ。」2014 朝日新聞全面広告 P16、17
- 7) 中央教育審議会 2021 P86
- 8) 高瀬淳 2017 「人材育成と学校力向上」（岡山県教育委員会『教育時報』810号）P7
- 9) 高旗浩志 2014 「考え抜く力を育む教師の協同－参画型校内研修の充実を－」（岡山県教育委員会『教育時報』778号）P6
- 10) 筆者は、森分孝治 1978 『社会科授業構成の理論と方法』（明治図書）に学んで作成したが、渡部竜也がこのような授業理論を再定義し、問いから授業を組織する方法を提案している。（2020 『社会科授業づくりの理論と方法－本質的な問いを生かした科学的探求学習－』明治図書）
- 11) 石井英真 2020 『未来の学校－ポスト・コロナの公教育のリデザイン－』日本標準 P89、90
一方、荒井克弘は、「高校教育の延長にある大学教育などに、高校生は魅力を感じるだろうか。異質な教育課程との接触、異質な文化の衝突こそが刺激と閃きをもたらす。」[2020 「高大接続改革の現在」（中村高康編『大学入試がわかる本－改革を議論するための基礎知識－』岩波書店 P270）]と述べ、大学教育と高校教育、大学の研究者と高校教員の分離を強調している。
- 12) 竹田義宣 2020 「高等学校教育再考」（『岡山朝日研究紀要』第41号）
- 13) 藤江康彦 2021 「これからの時代における教育センターの役割」（岡山県教育委員会『教育時報』858号）P4、5